後者の「無効果」という批判に対しても以下のような反批判をしている。

> EMの基本は有機物を併用し「効くまで使う」ということであり、効果が発現しなければ効くまで使ったことにならないのである。EMの使用にあたっては種々のマニュアルが出されているが、いずれもガイドラインである。EMの効果は、土壌や気象、有機物の有無とその量などで異なるが、使い続けているあいだに土壌が改良され、EMの密度が高まってくる。本質的な効果はその後に現れるもので、本書に紹介された事例でも明らかである。日本土壌肥料学会で発表された結果は、それらの原則をことごとく無視したものである。〜略〜化学肥料といえども何回もテストを繰り返し、その再現性をチェックした後に発表するものであるが、今回はEMが生きものであることを無視した一回きりの試験で断定的となっている（『農業が活きる・工業が変わる・環境が蘇る　EM環境革命』三五三-三五四頁）

また、比嘉はEM技術の＜現場先行性＞を強調するために、「事実は誰も否定できない確たるもの[16]」と述べたり、「失敗するのは、素直でなく、疑い深く、あれこれ考え、EMの活性を上がらない使い方をする“専門家”と称する人々だけである[17]」といった科学性を逸脱するような発言もしている。上述したように、ここで問題にしようとするのは、EMに関する議論を構成している各々の領域仮説である。確かに、それぞれのEMに対しての評価は対立している。しかし、その各々の議論は科学を領域仮説として行われている。また補足的に述べるならば、上でふれた最後の比嘉の発言は科学を踏み外しかかってもいるが、その他のEMが如何なる作用をおよぼしているのかについての説明は専門用語を駆使してなされており、とくに科学の素人ないし一般の人々にとっては、科学的であると言ってもいいだろう。しかし、EMについての説明は科学性を逸脱しうる可能性を秘めており、その説明様式は「科学的様式」によって構成されていると言ったほうがより妥当的である。

四　EMをめぐる「世界救世教」と「MOA」の対応

先述したように、岡田茂吉は化学肥料や農薬を使用する農業を徹底的に批判し、それらを用いない農業＝自然農法―その後その名称は「世界救世教」では「救世自然農法」、「MOA」では「MOA自然農法」となる―を推奨し、自然農法を実践・普及させるべく「自然農法普及会」を設立した。その後、それは「自然農法国際研究開発センター」へといたり、また全国各地に実験場を設け、化学肥料などを用いない農業の在り方について研究、模索してきている[18]。こうして＜世界救世教＞は自然農法を教団独自に研究していたのであるが、比嘉の教え子のなかに＜世界救世教＞の信者がいて、そこから＜世界救世教＞は比嘉とEMを知った。そして、比嘉に協力をもとめ、EMを通して＜世界救世教＞は自然農法を行うようになった。その後、＜世界救世教＞は教団改革によって分裂する。そして、EMに対する評価もまっぷたつに分かれることになる。すなわち、「世界救世教」はEMを推奨するのに対して、「MOA」はそれを全面的に拒絶する。以下、両教団のこのEMに対する対応をもう少し詳しく見てみよう。

まず、EMを推奨する「世界救世教」である。「世界救世教」は、比嘉の議論に全面的にのって、EMを用いての自然農法の実践・普及を行っている。いわばEMとの関連で「世界救世教」の活動は展開しているのである[19]。そうした展開として次のようなものがある。「世界救世教」にとっては

16)『人・くらし・生命が変わる　EM環境革命』二二頁。
17)『人・くらし・生命が変わる　EM環境革命』二九頁。
18) 両教団とも同名の全く別々の自然農法に関する研究機関をもつ。そこでは自然科学の知識を持つ専従の研究員によって研究活動が営まれている。
19)「世界救世教」は必ずしもEMを布教のための道具として考えているわけではないようではある。そして、EMとの関連で教団が着目をあびることになっているが、しかしそのことによって、信者の増加にはいたっていないようである。